

特集号「私と学習分析」の発刊によせて

松居 辰則^{*,**}

* 学習分析学会 会長

** 早稲田大学

Foreword to the Special Issue “Me and Learning Analytics”

Tatsunori Matsui ^{*,**}

* President, Japanese Society for Learning Analytics

** Waseda University

* matsui-t@waseda.jp

学習分析学会 (JASLA) 会員の皆様、ならびに本誌を手にとっていただいたすべての皆様に、心よりご挨拶を申し上げます。

本号の刊行にあたり、まず皆様大変喜ばしいご報告がございます。我々、学習分析学会は、この度「日本学術会議協力学術研究団体」として正式に指定されました。2015年にNPO法人として産声を上げて以来、研究者、教育実践者、そして企業の方々との密接なコラボレーションを通じて、「データに基づくより良い学びの実現」を愚直に追求してきた我々の活動が、日本の学術推進を牽引する代表機関から公的に認められたことを意味します。この場を借りて、学会の成長を絶えず支えてくださったすべての皆様に深く感謝申し上げます。

この歴史的な節目において、我々は学会誌の特集号「私と学習分析」を企画いたしました。本特集は、あえて厳密な形式や査読プロセスを設けず、研究者や実践者が学習分析 (Learning Analytics: LA) とどのように出会い、どのような試行錯誤を経て、いかなる未来を描いているのかを、それぞれの「私」の視点から自由な粒度で語っていただくことを目的としています。

すでに寄せられた熱量あふれる玉稿を拝読し、私は

LAという分野が今、極めて重要かつスリリングなパラダイムシフトの只中にあることを確信しています。

この特集号の論考に共通して流れているのは、テクノロジーが極限まで進化し、AIが容易に「正解らしきもの」を即座に導き出せるようになった現代において、我々LAコミュニティは「結果としての表面的なログ」の収集に満足してはならないという強い自戒です。人間の認知と身体に深く根ざした「学習プロセスの本質」へと分析のメスを入れ直し、真の学びを保護・促進するための意図的なシステムデザインへの回帰が求められているのです。

日本学術会議協力学術研究団体としての指定を受けた今、JASLAに求められる社会的・学術的使命は一段と重くなりました。それは単にアルゴリズムの予測精度を競うことではなく、教育学、認知科学、情報工学などの多様な知を融合し、教育DXの奔流に対して確かな学術的エビデンスと実践的指針を社会に提示していくことです。

本特集号に散りばめられた多種多様な「私と学習分析」の物語が、読者の皆様自身の経験と深く共鳴し、次なる研究活動のインスピレーションとなることを願ってやみません。学習分析の新たな地平を、皆様と共に切り拓いていけることを楽しみにしております。